

【狼は子羊と共に宿い】

▼先ず6～8節をご覧ください。 6節。

『狼は小羊と共に宿り／豹は子山羊と共に伏す。

子牛は若獅子と共に育ち／小さい子供がそれらを導く』

一緒にいられる筈のない者同士が、しかし、共にいる、しかも平和で共存するということが記されています。

本来、あり得ないことであります。

▼ごく限られた条件下なら、不可能ではないかも知れません。つまり、狼と小羊、どちらも自然の中で生まれ育ったのではなくて、人間に飼育されているとすれば、それも、未だ幼く、本能に目覚めていなければ、そんなニュースが放映されるかも知れません。

豹と子山羊、子牛と若獅子についても、同様であります。

▼ちょっと気になりますのは、『狼は小羊と』であって、子狼は羊とではありません。子狼は羊となれば、少し実現可能性があるのではないのでしょうか。同様に『豹は子山羊と共に』ではなくて、子豹は山羊と共にならば、あり得ます。

ところが、3番目、『子牛は若獅子と』、これは初めから該当します。

▼矢張り、『狼は小羊と』と描かれているのは、あり得ないことが現実になるという預言であって、それが起こりうる可能性を探しても意味はないと考えます。あり得ないことなのであります。

▼以下、イソップ物語の一つを引用します。

大きな悪い狼が子羊を見て、食べたいと思いました。

しかし、すぐには子羊を食べません。狼は子羊を殺してしまう口実を考えました。

人々に悪い奴とは思われたくないからです。

そこで狼は子羊に言いました。「去年、おまえは私の悪口を言ったろう」

「私はまだ赤んぼうです。去年は生れていませんでした」

「おまえは私の夕食を食べてしまったろう」

「あなたの夕食なんて食べられませんよ。まだ幼いんです、飲むことしかできません」

「おまえは私の水を飲んだらろう」

「でもお母さんのお乳しか飲めないんです」

「そうかい？」

狼は言いました。「でも私は食べることができるし、おまえを食べてやろう。

今すぐに、夕食がほしいからな」

そういって、狼は子羊にとびかかりました。そしてそれが子羊の最期でした。

教訓が付いています。悪事を働こうとする者は、いつも何かしら口実をみつけるものだ。

▼生き物の楽園という類のテレビ番組を良く見ます。地上の最後の楽園という表現もしばしば見られます。鯨やイルカが楽しそうに泳いでいるような海、多くの種類の生き物が棲息し、楽園と呼ばれるのに違和感がない、自然豊かな土地があります。しかし、ここでは、毎日毎日、自然の中で、それこそ、ごく自然に捕食行為が行われています。

大きな強い生き物が、小さい者弱い者を食べる、それをまた、より大きな動物が捕まえて殺し、食べてしまうということが、日常的に行われているのであります。

鯨やイルカのような大型の海洋生物が、一日に食べる小魚などの生き物の数は、半端な数ではありません。正に、日ごと繰り返される大量虐殺であります。

これが本当に天国なのか、楽園と呼ぶことができるのか、むしろ、弱肉強食の地獄ではない

でしょうか。

▼7節。

『牛も熊も共に草をはみ／その子らは共に伏し／獅子も牛もひとしく
干し草を食らう』

私は毛蟹や車海老が好物です。決して安くはありませんが、時々買います。忙しい時間が続いた後、一所懸命に働いた後、まあ、言ってみれば、自分へのご褒美というところですか。私の家族は特に好物という訳ではありませんので、殆ど独り占めで食べます。

それはよろしいのですが、食べる前には調理しなくてはなりません。調理とは、要するに、殺すことであります。

財布に無理をして買ってきては、料理する段になって、ちょっと後悔します。こんな残酷なことをしなくても良かった、他に食べ物はいくらでもあるのに、買わなければ良かった、でも、買ってしまったからにはもったいないし、今更海に帰すことも出来ないし、… 結局食べてしまいます。

▼つまり、殺してしまいます。車海老がフライパンの中でバタバタ跳ねている音を聞くと、何と残酷なことをしてしまったと悔やみます。しかし、結局食べてしまいます。

予め捌いたものを買ってくれば、こういう修羅場には出会わなくて済みますが、生き物を食べる、誰かが殺したものを食べる、それに違いはありません。

▼そんなことを考えますと、菜食主義が正しいような気が致します。私は、青年時代の一時期、トルストイにかぶれて、肉を食べるのを止めました。2年間くらいでしょうか。行きつけのラーメン屋さんでも、必ずチャーシューを残すものですから、チャーシューが入らなくなり、代わりにメンマが大盛りでした。

江戸時代までの日本では、四つ足は原則食べません。

そうしますと、イザヤの教えは、ユダヤ教よりも、キリスト教よりも、仏教でこそ、実現していることになります。

▼しかし、一例として上げれば、ウサギを数えるのに、一頭二頭とは言いません。一匹二匹とも言いません。何故か、1羽2羽であります。どうしてなのか、ウサギは獣ではなく、鳥だからであります。鳥だから食べてもかまいません。

このことも、そうですし、獣は駄目、魚なら良いと言うのは、そもそも偽善的であります。いっそ、イノシシも1羽2羽が一匹二匹にした方が良かったかも知れません。

▼ところで、狼と小羊、豹と子山羊、子牛と若獅子、更に、牛と熊、獅子と、牛これらは、憎み合う敵同士という組み合わせではありません。捕食者と被害者であります。食べる者と食べられる者であります。一方的な加害者と被害者であります。

つまり、イザヤ書に描かれている場面は、互いの歩み寄りではありません。仲直りでもありません。まして調停や和解ではありません。

私たちは、今日の箇所を読んで、自分をどちらの側だと考えるのでしょうか。食べる側ですが、食べられる側ですか。

▼このことは8節にきわまります。

『乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ／幼子は蝮の巣に手を入れる』

これは初めから食う食われるの関係ではありません。むしろ、危険がない、不幸がない、そういう究極の世界であります。

それが9節に表現されています。

▼9節。

『わたしの聖なる山においては／何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。』

水が海を覆っているように／大地は主を知る知識で満たされる。』

ここも少し拘って読みたくなる表現であります。

つまり、『害を加えず、滅ぼすこともない』とあります。「害を加えられず、滅ぼされることもない」ではありません。

食う食われるの関係で、変えられるのは、変えられるべきなのは、食べる側なのであります。

逆に言いますと、自分を食べられる側だと考えている人は、変えられることはないであります。罪の告白はないでしょう。

そして救いに与ることもないであります。

自分自身を捕食者だ、弱い者を食べる捕食者だと認識しなければ、告白しなければ、イザヤ書を読んだことにはならないのであります。

▼4節。

『弱い人のために正当な裁きを行い／この地の貧しい人を公平に弁護する。

その口の鞭をもって地を打ち／

唇の勢いをもって逆らう者を死に至らせる』

ここに描かれていることは、一見、平和とは逆であります。

特に後半部分、

『その口の鞭をもって地を打ち』

鞭とは、普通には動物を従えるためのものであります。『口の鞭』つまり、言葉が鞭のように、悪しき者を鞭打ち、たしなめ、従えるのであります。

福音宣教は、『その口の鞭をもって地を打』つ業であります。

一番簡単に言えば裁きであります。

▼厳密に言えば、誰かしら悪しき者を鞭打つとは書いていません。『地を打ち』であります。つまり、この世界そのものであります。

鞭打たれるのは悪しき者であって、自分に関係ないと思ったら大間違いなのであります。

自分自身を鞭打たれる者だ、鞭打たれるべき者だと認識しなければ、告白しなければ、イザヤ書を読んだことにはならないのであります。

▼『唇の勢いをもって逆らう者を死に至らせる』

最近、ロバート・マキャモンが書いた魔女裁判の本を読みました。魔女は火あぶりにされますが、魔女に操られた男は、鞭で打たれます。1回で激しい痛みと共にみみず腫れがはしり、同じ場所を叩くと皮膚が破れ、痛みよりも熱を持つそうであります。3回目、痛みと熱のために気絶します。

鞭打ちは10回なされるのでありますが、実際にはそこまで必要ありません。その前に死んでしまうからであります。

そういう恐ろしい場面を読みました。

▼『その口の鞭をもって地を打ち／

唇の勢いをもって逆らう者を死に至らせる』

この厳しい刑罰と、

『弱い人のために正当な裁きを行い／この地の貧しい人を公平に弁護する』

この厳しい裁きと、福音的知らせとは、全く重なるのであります。裁きのないところに、刑罰のないところに、平和は実現しないのであります。

▼それは、クリスマスの場面でも同じであります。先週も引用しました。マリアの賛歌。

『50:その憐れみは代々に限りなく、／主を畏れる者に及びます。

51:主はその腕で力を振るい、／思い上がる者を打ち散らし、

52:権力ある者をその座から引き降ろし、／身分の低い者を高く上げ、

53:飢えた人を良い物で満たし、／富める者を空腹のまま追い返されます』

裁きと福音は全く重なるのであります。

▼3節。

『彼は主を畏れ敬う靈に満たされる。目に見えるところによって

裁きを行わず／耳にすることで棄護することはない』

神による裁きが行われて、初めて平和が実現するのであります。

この箇所については、以前にこの箇所を読んだ時にお話ししたことを、簡単に要約してお話しします。

データが残っていないので、何時の時は忘れまして。

▼普通ならば、『目に見えるところによって裁きを行』いでしょうし、『耳にすることで棄護する』でしょう。

きちんと自分の目で見て、正しく裁きをつける。きちんと自分の耳で聞いて、正しく裁きをつける。そういう表現が普通だと思います。

しかし、『目に見えるところによって裁きを行わず／耳にすることで棄護することはない』と記されています。

『目に見えるところによって裁きを行わず／耳にすることで棄護することはない』とは、人間の恣意ではなく、神の御旨に従ってということでありましょう。

正しい裁きによって生まれる、正しい平和とは、神の御旨が実現することです。

▼しかし、誰がこの裁きに刑罰に、鞭打ちに絶えられるでしょうか。鞭は10回ではなく、30回も必要かも知れません。それ程に、人間の犯した罪は深刻で、重いものがあります。

人は、せいぜい鞭打ち3回しか耐えられません。

犯した罪に足る贖いを果たすことは出来ません。

この鞭打ちに耐えて下さった方がいます。鞭打ちに絶えられない人間のために。

それが、イエス・キリストであります。

▼常に申しますように、クリスマスとは、神の子が人間の姿になられたこととあります。人間の姿になられたとは、病、死、孤独、こういった苦悩を自分のものとされたということとあります。

神が、裁かれ、鞭打たれ、つばを吐きかけられ、罵倒され、そして殺された、それがクリスマスによって始まったのであります。

神が、裁かれ、鞭打たれ、つばを吐きかけられ、罵倒され、そして殺された、ことが、人間の救いになるという、大なる逆説であります。

神は、悪しき者を裁き、鞭打ち、つばを吐き、罵倒し、そして殺すのではなく、裁かれ、鞭打たれ、つばを吐きかけられ、罵倒され、そして殺される者となったのであります。それがクリスマスであります。

▼1～節。

『エッサイの株からひとつの芽が萌えいで／その根からひとつの若枝が育ち

2:その上に主の靈がとどまる。知恵と識別の靈／思慮と勇気の靈／

主を知り、畏れ敬う靈』

▼6～8節以下に描かれる平和は、相対的なものではありません。誰かが幸福になる代わりに、誰かがその犠牲になるというようなものではありません。ここに描かれる平和は、絶対的な平和であります。

そもそも平和とは何か、平和とは戦争がないことなのでしょう。その通りでありましょう。それは平和の大前提であります。しかし、戦争のないこと、イコール平和ではありません。

『主の靈がとどまる』、『主の靈』に満たされることが平和であります。

まして、私たちの教会に於いて、『主の靈』に満たされることが平和であります。